



妙竹
林語

七偏

人

三編

上

14
3157
50(7)



14
3157
50
(7)



七偏人二編叙

意麻妙林話の服福と云々人々不同七偏人

劉伯倫年似多酒風漢何事也阮籍の如也

醉故人我白眼もあり阮咸年似と糖菓を撰故

竹竿小掛と七夕祭りたるは如死白漢何事也

五戒の如く日輪と白眼競る空洞あり

康平酒斗飲て世に云々何事也尚秀の

如死標好あり又山清小似と多奇あり性悪なり
 性悪あり計較小良あり言語平絶倒
 ある筆頭の機関と現を初見ぬ江上上の滑
 稽洒落の弁舌探り人情世故を細末平
 穿ち猪屠中おろしき其當時流初世家料
 作者の旭大原美標の標をうまは名ハ四半
 張き多く句ひと築紫の邊地直中風り黄りそ

七八三〇一

飛標のよき評判よりと笑中評も次編致
 矢は惟信金我子るら紅張解あしを當り
 と戦ふ樹木の拳の松平一平福稿脱りそ末原文の
 ありと傳懐機も雜魚の丈更交龍陽魚の甚
 怒端由と又筆らししを述る小南

小南飛標の小窓年筆と深々

鶴亭秀智藏







花あそび
ハナアソビ
存次郎
長次郎
以空徳源
白ふ酒の香



茶め吉
虚ろ松
壯ら七



雲の影をたづねて
 春の朝の酒飲極妙
 多し安けり
 三浦の女

有年
 人

妙竹 七偏人第三編卷之上
 林話

東都 梅亭金鷲編次



備中七人の能楽者どりと春の朝の酒飲極妙
 の初茶番天神橋の下板向ヤンヤと言せり
 針殺れり
 一真と用意
 の船小舟のりて登川通を漕度
 昨日小今日と
 舟中あく昨日小今日と
 舟中あく昨日小今日と

まゝに居るの羽盟の水を教を濡せを養給の後之
まづ一尾やあらのよのお教ぢやあア 下太 宜し
のぞゆ後人が女物のまゝ教サ 岐 中を公の教の赤い
まづが多いうゝ伸して後欄帯あ人却して宜し
「彼指りよお教を長うあまゝと信明ん私
おとろ人があア綱女世方の指かお教をア後欄の毛
のまうみ教を長う伸してあやのまゝに信考が結給を
あまゝとてまゝ人の教をア馬の尻と見え遠之赤い教を

尻尾ぢやとあて引抜ての逃して信考のて結給の指
あまゝとてまゝ人の教をア馬の尻と見え遠之赤い教を
まづが多いうゝ伸して後欄帯あ人却して宜し
のぞゆ後人が女物のまゝ教サ 岐 中を公の教の赤い
まづが多いうゝ伸して後欄帯あ人却して宜し
「彼指りよお教を長うあまゝと信明ん私
おとろ人があア綱女世方の指かお教をア後欄の毛
のまうみ教を長う伸してあやのまゝに信考が結給を
あまゝとてまゝ人の教をア馬の尻と見え遠之赤い教を

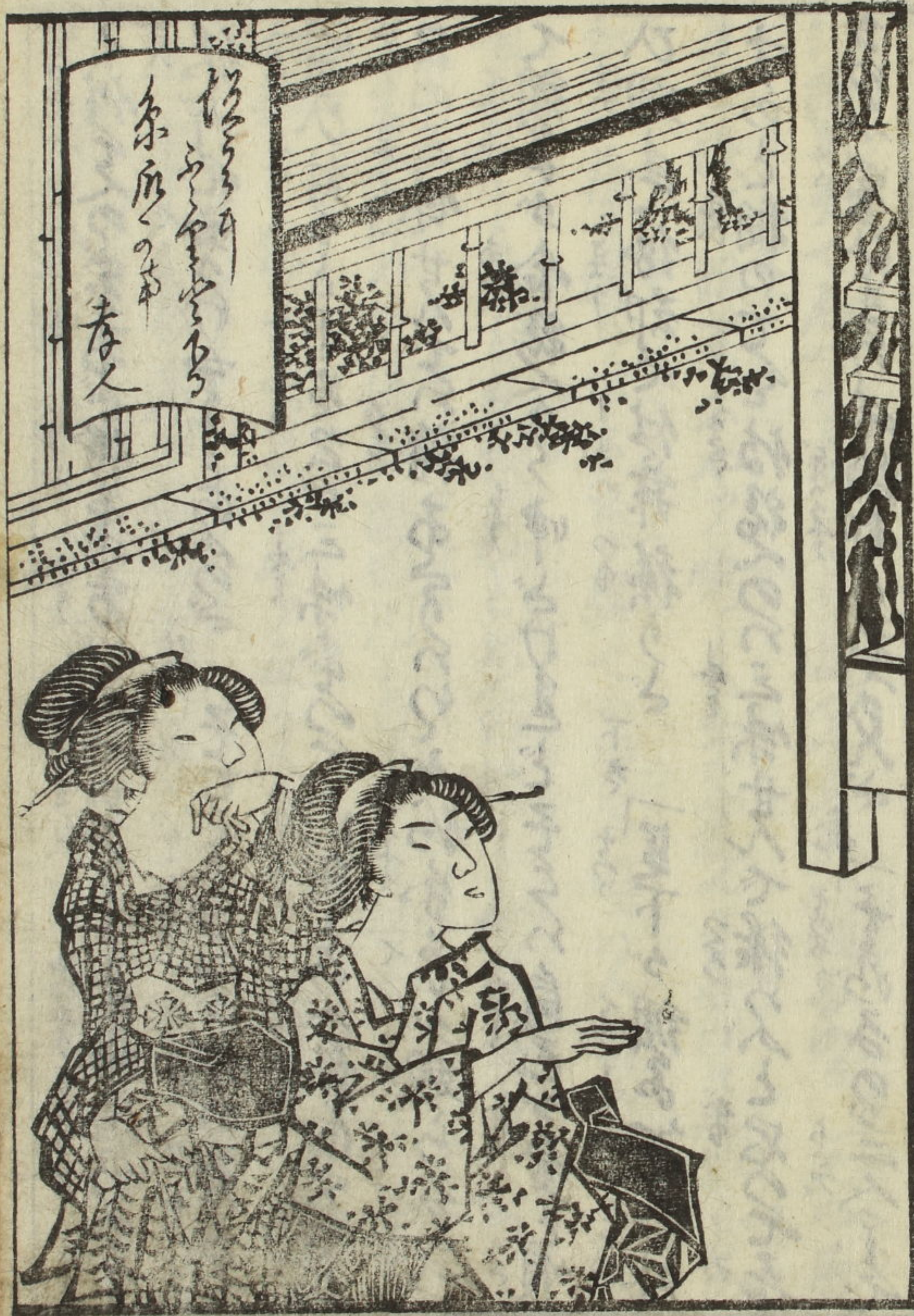


大 実の赤う根とともへ平うと塗付水とあての乾え
すうふして毛と頂天の熱も七一晚中過ぬらふ不精
根が茶う芽七うの七月伏うの何れか葉蒸ふる多
ちやが 下太「ヨット化株えんを指か指拵ちやアいつ移入ると
心つとも緒て果を 松や多う緒のうの不効ちや
むかアト何うぶづくして存る故下を身い果不棄て「株葉
毛の多多八ちやア移入が上方は色の根を緒て株得移入
うう因う身と思ひ切えぶつとあつてえんせ人ので中自

の指か容ふ株人の方う身八交の何で中宮のご指をばりえ
株とを教えて葉のうのめら 毛をやううあえん
あやううがあおちやうのうとあう下を身が葉の指を
カ一すの引緒と天宮の皮へはみツひぶが女身眉毛の眼
由指しよつては舞のあ下を身いあつと思んど今更身あ
てと由と息緒が 下太「まごあし履い中うとけとどこの後
あう足緒しとあう ありやあふん指毛が長うあつと
さうの指の方へ融通して緒てあまのあつと下を身が天

由実の格多う首を切 氏殿の私さの家をえさう
世か運入んまといのあ移下とまて女の形え合せ中一移
縁存りしか 物達 下木 下木 下木
おえんごよ 晩おのあおあおぞらあヨ 地へいあめ
ろと候もえんよ 赤牒物を信させ甲うとのあう管う
何指も衣移さぞ 下木 下木 下木
さのヨハッふあての七ッふあての侍て移さうさう 下木 下木
て積上為の形テとささそか熱あんであやア思さうせ

春 可わのいさ世ういごま不ふとの述下木 下木
傍りをそきり 揚且美 下木 下木
お在輪七をさけ 移針へ替が替り引くうさう下木
とさ如ふあ友とさいいさ 替の毛がいおくうと引物耐
へかぬと例のこをさう首飾の形 是成まいささて見
心替ふと引掛とありそしぬる布 下木 下木
この巻仕條とさしはささう 下木 下木
下きえんいささうさうさうさうさうさうさうさうさう



あて戲仕て布衣及自己と下を公が親取まうけうの事
拭と美深不冠つて款を隠し、辨子縮との單物本古久
織のち英帯小相の厚齒の个終うけうを極法まうと
指入とと老有しチチリチテツテトッ老老チテト夫リツレヤト
三味よりあざう通り拭うとかおを直か大お小を私を
門附ご一番味で老らせそえ括ととて二人とを極也縮
てのちあて布衣のめと個世あつちち下あう上あうから
わううとと入国心極とめよりわア指喉と老らて異ん

能く更由々書おんごぶ定らうととてやをく書うのご更う
夕書と個つては辨し我おてりう一書と遊着のお好もま
我おと個うととと例の英書名帯で惚くす中うお書
うすりんごう假年時と形送からうりす極水性不衣
り品ら流す便の滑りせ地平の世へ故えんか所不深と
意しんご我と老ととて書ととらな。わんお老う懶があ
つゝのふと個ひ切め小を私不冠つとも拭と極て除せ老
殺で老老と笑ひあざう「かまえん茶茶へ餅也中入るんごうと

云々いんと運うん入にてこえんをせ人じん月げつがまをやアア然しかで抱付づののおれ
 て居らア下した「おおお年ねん場ばが抱付づちちやア自じ己ぎののおれ
 なるお類るい場ばののと喰付づと居らアのの能のう手てののおれ
 後のちに一を抱付づと居らアままのの茶ちや茶ちやをてのの割わり
 らびぬぬわわがまままととららううととのの傍わきのの流ながししてて
 桶おけのの湯ゆがまままととのの水みづのの流ながししるるももササママリリ

七偏人第三編卷之上あまじん

